
 私がなぜ現在の科目を選んだか

「眼科」

信州大学医学部眼科学教室

高橋良彰

初めて自分が「眼科」に出会ったのはポリクリの手術見学でした。何の手術を見学したかの記憶は定かではありません。真っ暗な部屋の中、手術映像がまるで星空のようにキラキラ見えたことが強く印象に残っています。印象というのは強烈で、自分の“心”から離れません。研修医2年目の頃には非常に良くしていただいた消化器内科の先生を裏切ってしまう形で、この印象から離れられず眼科を志望しました。先生、申し訳ありません…。

研修医として眼科を回ると印象も少しずつ変わってきます。「星空」は「網膜・硝子体」へ、「きれい」は「何をしているんだろう」という疑問へと変化しました。眼科の硝子体手術は“硝子体”という本来透明なものを切る手術です、側から見ていると本当に何をしているのかわかりません。やっていることを教えても

 私がなぜ現在の科目を選んだか

「麻酔科蘇生科」

信州大学医学部麻酔蘇生学教室

堀谷勇介

結論から言うと「縁」です。私は人生すべて縁で出来ていると思っています。川真田教授はじめ、麻酔科の様々な先生方に「うちにおいで」と言って頂けたのが大きいです。やりたいことは様々あると思いますが、流されて選択する人生もありだと思っています。もちろん自分の性格や適性はあります。私の適性から言うと病理科や血液内科などが合っています。色々な論文や本で調べながら、現状と照らし合わせ合っていない部分はまた調べながら前に進む。その時間軸は日ごとで、という状況が私にとっていいパフォーマンスを発揮できる働き方でした。実際、研修させて頂いた時は楽しく勉強でき、働くことが楽しいと感じ、この科に入りたいと思っていました。ただそれは自分がやりたいと思っている範囲内、想像出来る範囲でしか行き着けない人生だろうと心のどこかで思っていました。その頃、麻酔科（手術室）でお世話になり、時間軸が私の

らっても手術を見る目がないため、訳のわからない難しそうな機械を操作する不思議な手術でした。こんな全く意味のわからない手術を、自分で機械を操作してできるようになると一体どんな世界が見えてくるのだろうか、その手術への感情が「憧れは止められねえんだ」でした。

信大の眼科は症例数、先輩・指導医の先生に恵まれており手術を修業するに非常に良い環境です。多くの症例を時間を掛けて丁寧に教えていただいても、上手くいかず「才能ない才能ない」と嘆く日々、それでも一人のできる手術も少しずつ増えてきています。憧れの硝子体手術まではまだ永い道のりです。

どれだけ症例を重ねても手術後初回の診察は心の中で（大丈夫かな…見えているかな…）とドキドキがなくなりません。当然全ての症例がうまくいく訳はなく、視力が改善しない症例に心を刺されることもしばしばです。しかし視力が回復した患者さんの喜びは一入で、その喜びを本当に大きく伝えてくれます。その度に眼科医になって良かったと思い、また少しでもそうできる可能性を増やせるような日々奮闘しております。

（信大平30年卒）

もっとも苦手とする秒単位で、問題が起きるとすぐに対応しなければ患者に危害が及ぶという現場でした。心不全の患者を10時間薄氷を踏む思いで安全に管理する。病棟の方に緊急気管挿管する。心停止すると処置を施す。すべて判断は一瞬で転帰は最悪になるかもしれないし、自分次第では未然に防げる。その時の判断を取り返すチャンスがあることは少ない。そのようなところに、ものすごい怖さを覚えました。しかし、それと同時にこの人にしか出来ないことはない。すべてアートで成り立っている科はなく、サイエンスに基づいているため今できなくても、10年働き続ければこの先生達のレベルまで到達できるかもしれないとも思っていました。私はこの職に付く前は獣医をしてました。街の獣医ではなく、臨床もするが研究（フィールドワーク）もするという獣医でした。獣医と人医のはざままで、研究を通して、生物の根幹に迫り、どちらの分野にも貢献するという信条はあります。その信条を曲げてまで流される必要はないですが、自分がこうなりたい、だからこれを選択する！という道を切り拓くのもカッコいいですが、たんぼぼの綿毛のように風にふわりと飛ばされ、流れ着いた先が生きる場所というのも良いと思います。

（信大令2年卒）